



繡像  
綺譚

石言遺響

~ 13  
3816  
1



東都曲亭主人著

國字水說  
氏第奇書

繡像

綺譚

石言遺響

乙丑新鐫  
全部五冊

書肆

平林堂  
昌雅堂  
合刻

石言遺響自叙

齋作堂

遠陽子夜山寺鐘石之故事傳口碑也尚矣然傳記無考據緇流之說半屬于妄誕先輩嘗論其事跡者凡二本或以為天平中事或以為弘安中事其年紀相拒五百餘年其說互異享和壬戌年予親經歷其地而問諸

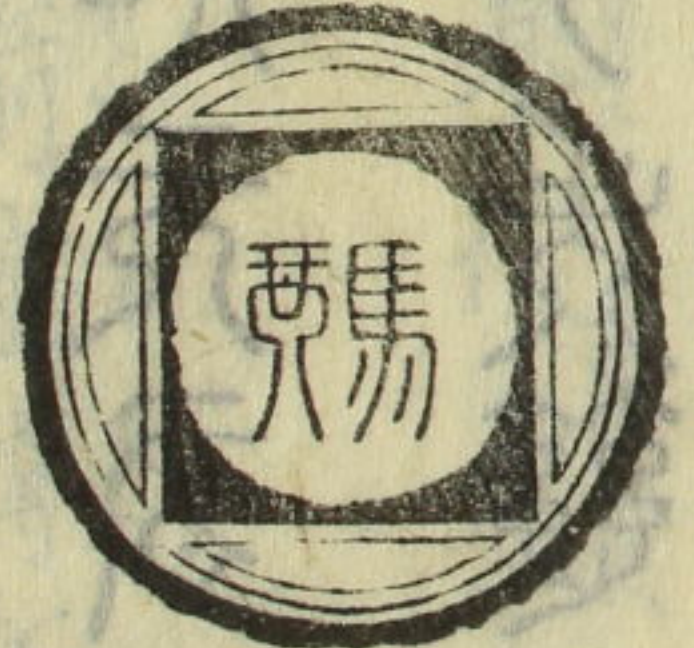
復惟石言遺響卷之一

古老而得其淵源。遂參訂諸說。更發新研。嗚呼！天地之間。神靈怪異。不可測。議者往往而有焉。予嘗讀記載。豐山之鐘。自鳴。魏掄之石。能言。是亦雖浮誕。不經之言。頗與中山事迹相似。夫理之所當無。而事之所合有者。猶有非鳴之理。而鳴。非言之物。而言。因

題曰石言遺響。刻成弁于厥端。

文化新元甲子年暑月龍生日書於飯顛山之東翠竹深處。

曲亭主人



Vertical text on the left edge of the page, likely a page number or chapter reference.

水爽山中石誰知元氣緣

然尺愈貞苦孺子失慧頓

彼倆起幾賊嘗提倫岩禪

罷文令援帶精細紀當岸

蘭洲秋驕



繡像復讐石言遺響總目錄

○仁字號

第一卷

一篇

二篇

○義字號

第二卷

三篇

菊河小兆殿司寃鬼と看る

槇原小月小夜慈雲を望む

勅を奉る良政遠嶽小登る

慶と顧る俊基後身と示る

怪鳥を射る一箭家傳と顯る

邪正を異めて両妻枕席を譲る

復讐言石言遺響卷六

四篇

○禮字號

五篇

第三卷

萬字前流言して元配を誦る  
主計め謀を定て幼主を救ふ

六篇

○智字號

七篇

第四卷

賢母 葛地了 火宅を遁る  
孝子 十年 寒家を成る  
業右衛門 野合して 關東に歸  
香樹麻呂 奮勵して 吉野に赴

八篇

○信字號

九篇

第五卷

短笛を懐み 壯士玉を瘞  
鬪子を憐れ 靈僧錫を買

十篇

恨を抱く 玉衣鐘了 祈る  
夢と占く 巖峰孤を 託す  
柏波樂不 賊婦客を 留む  
宿河原不 梵論 雙を 獲る

編列十條

全部五卷

繡像復讐言石言遺響總目錄畢

復讐言石言遺響卷之一

四

〇

清道禪尼 せいどうぜんに



十載施為孝與貞。勞心焦思擲  
芳生慘然不懈能供佛。令德猶  
傳身後名。  
文海老漁 文海老漁

橘主計女 たちばなぬしけいのめ



意外送春春有無滿林風雨定  
榮枯殘香竊貯銀瓶水一朶晚  
花俄頃甦 ハカニヨミカスル  
飯顆山樵 飯顆山樵

豪首原來  
 曉散鼠貪  
 婪竊疾世  
 情通盤牙  
 連歲寧藏  
 避難出天  
 羅地網中

甲子夏孟  
 瓊吉書



山客阿高



四界

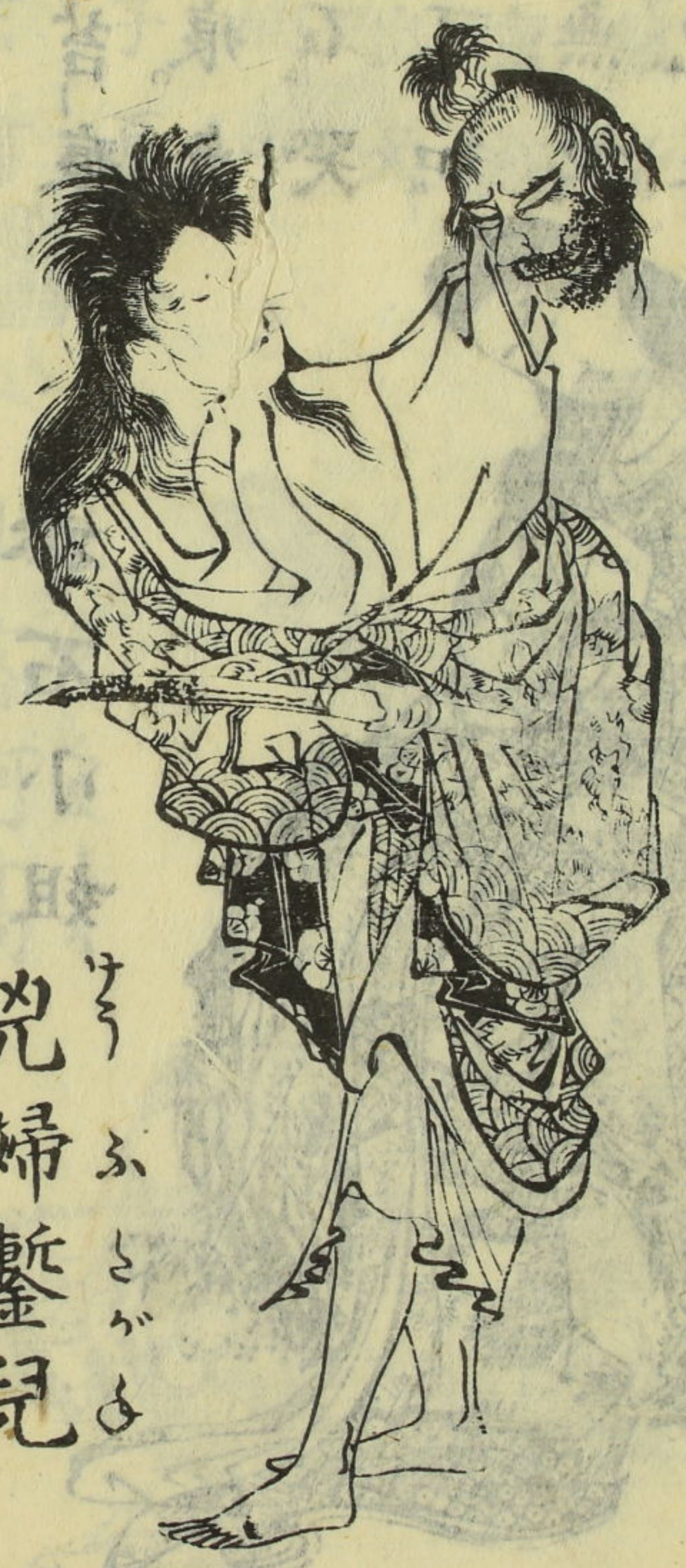
一片苔痕  
 是泪痕貞  
 魂徹石哭  
 黄昏可知  
 烈女無他  
 伎分婉墓  
 中憑古村  
 著作堂主人  
 自題



拳石小姐

昔日曾眠<sup>カウテ</sup>瑶席<sup>ヨウセキ</sup>暖<sup>ニ</sup>今朝忽<sup>チナル</sup>作<sup>ニ</sup>綠林<sup>オメスレトノワレ</sup>伴<sup>ト</sup>  
推理<sup>レメシモ</sup>使<sup>ニ</sup>丈夫<sup>ヲメ</sup>還<sup>テ</sup>惶<sup>レ</sup>現<sup>ヨメシモ</sup>報到<sup>ル</sup>時山壓<sup>オス</sup>卵<sup>ヲ</sup>

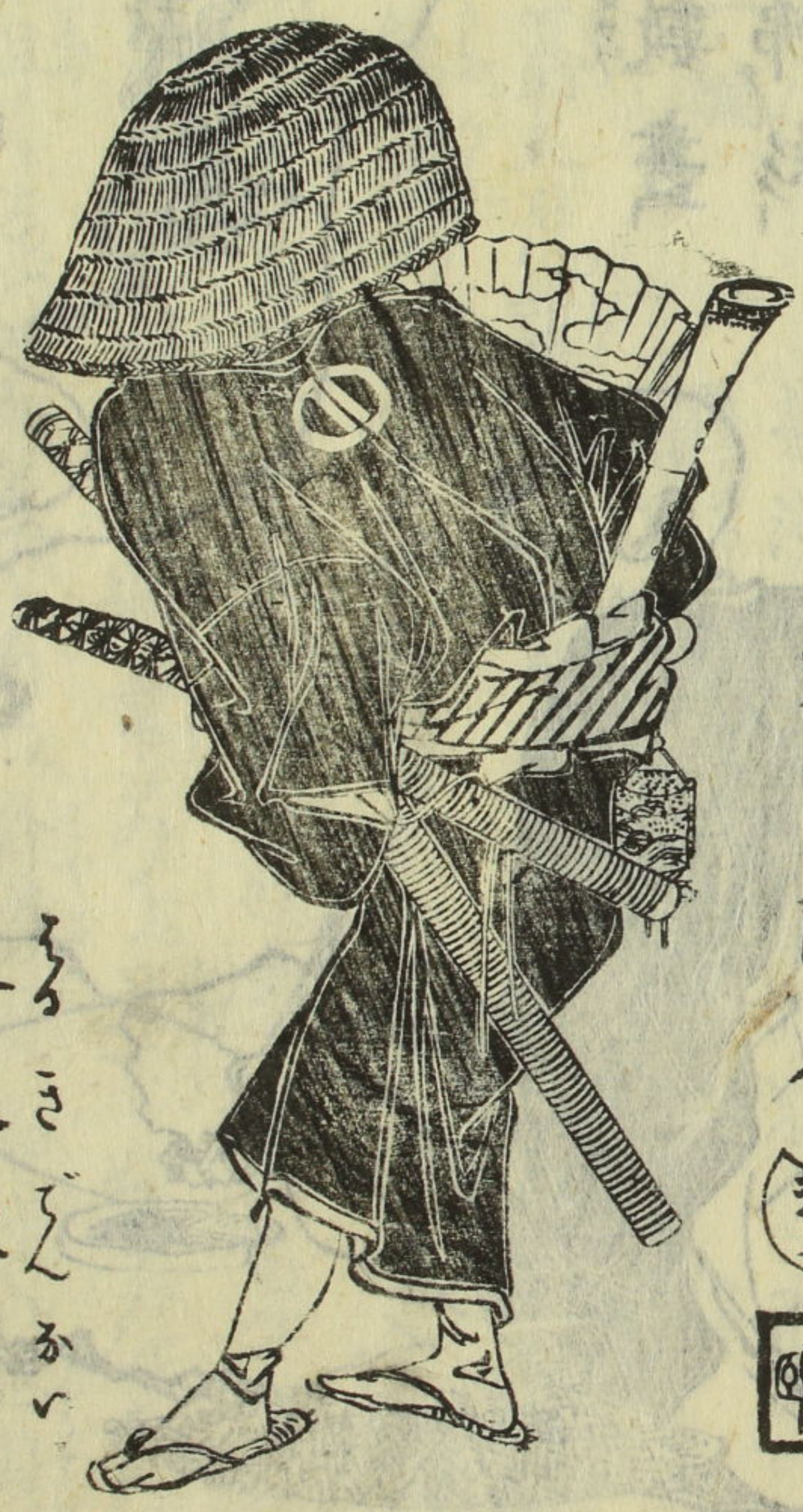
簑笠漁翁  
  




兇婦<sup>ケウ</sup>鑿兒<sup>ふとがも</sup>

白玉<sup>ハクメイ</sup>瘞埋<sup>エイマイ</sup>杯土<sup>ハカノツダ</sup>裡<sup>ニ</sup>黄金<sup>オウゴン</sup>拾帶<sup>シツポウ</sup>穿<sup>セキ</sup>壇<sup>ダン</sup>中<sup>ニ</sup>  
孤忠<sup>コチュウ</sup>雪<sup>ユキ</sup>寬<sup>カン</sup>豈無<sup>ニ</sup>報<sup>レ</sup>請見<sup>コト</sup>天公<sup>テンコウ</sup>儂<sup>ニ</sup>九重<sup>クワウ</sup>  
魁蕃<sup>ケイハン</sup>陳人<sup>チンジン</sup>

春木傳内<sup>ハルキデン</sup>



北殿司吉山



吉山獨數畫

中禪淡拂彩

毫靈驗傳孤

幅偶貽貧女處白衣菩薩

坐青蓮 雕窩題



繡像復讐石言遺響卷之一

東都

飯台 曲亭主人著

門人 魁蕾癡叟校

菊河小北殿司寬鬼を看る

摸原小月小夜慈雲を望む

第一編

正慶二年夏五月。諸國の官軍一時小峰起。新田義貞の大軍既了鎌倉を攻入りけさ。同廿二日北條相摸入道高時東勝寺小千と自殺す。平氏の一族悉くはろびうせく。後醍醐天皇隱岐國より還幸あり。天下ゆきびああり。め。四海且くああり。ある。洛陽東福寺小北殿司大道和尚と。老師をせり。その分渡洛國は生れて。く

復讐石言遺響卷之一

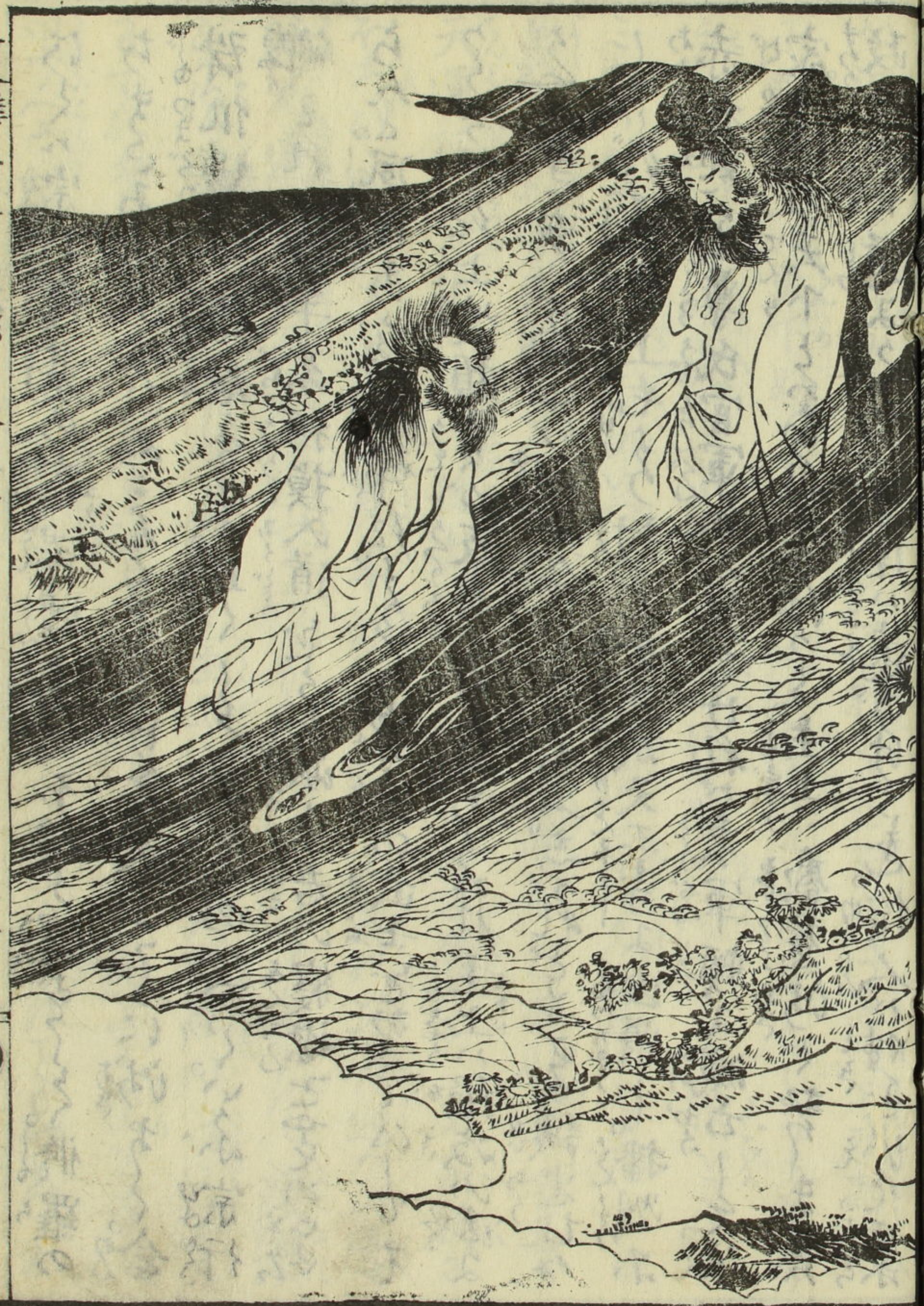
父母よおらまき幼きより釋門に入て吉山明兆と号し元より才学  
 衆小きされしもまばらんとあふ及てひらく經律論の三藏小  
 通に四攝八解中會得せり。まろのミナクはる性画を嗜み  
 彼毛延壽吳道子が寫真金岡常則が丹青傳神々の微妙  
 又抵どつとあく弱年より花洛に遊學し。東福寺を會  
 下ふ系づく禪家の玄樞を究つりあそりのく世人これと東  
 福寺の北殿司と稱し時に明兆發願しと好めし。これ  
 たましく丹青を弄づり。何ぞいづづふ山水人物のを寫し  
 俗客の眼をとまごがむろとてまづ三世的父母此菩提  
 み。五百の阿羅漢二十八祖三十三身の觀世音千幅と画  
 たり。諸國の靈場は細ふふとと奮激し。ひろく繪具谷の  
 草庵よりまのり居多の佛像と摸寫し。これと北月お妙  
 と鎌倉あそおのひたぐる日數経く。遠州佐野郡小夜の  
 中山を越ける日。阿八が嶽をる觀音寺お詣り。画幅を暮  
 供し。遂ふ寺に立出ぬ。おは日も高うりけまはとく大堰  
 のそろそとんと。ゆりく菊河乃る岸よりりぬ。あろハ長月の  
 けあかれ名あり。およき河の菊爛熳と咲みされ香氣  
 馥郁とく。汀も黄金水を流まて。如く兆殿司は光  
 景とえく。忽ち懐舊し。つぎ杖を川の上ふと冬くいり。  
 ひろく兼久の亂は。中御門入道前中納言宗行卿小  
 山左衛門尉朝長は伴まこ。關東より下向の刻終り。此地  
 みく殺し。まらづたは定りければ。

昔南陽縣菊水汲下流而延齡  
今東海道菊河宿西岸而失命

と辭世の二句を遺し。ちりくはいぬる元徳二年。吾人石少  
辨俊基朝臣内勅をうけあがり。高時禪門とくふけん  
と謀りしも。忽ち夏あつれく囚人とたりし時亦あえて  
失ふべかりし。写しえけまば

いあつしものるため。とくく河のおる。流まよむとや伏の  
とにむささして。共は七月の祭と清ぬひぬ。夫生死いこれ水のあが  
るうがてりく。榮枯と秋菊の落英も似たり。得喪返覆の理を  
あつバ富貴もゆるせん無常迅速あることと悟らぬ弥陀佛  
と念むるふあつべ。うも博學の夢えあつ。宗行俊基互み

百餘年を隔く。殃をねあつ。うあつまひ。うう。とことひり。ち  
且く回向し。眼をむけけ。怪む。一吟。曉る。思。忽ち結  
陰て霧四面ふ。立のり。燐火水中うめえ。出く。岸の上下ふ  
た。び人あり。鬼火に光く。ふこれと見え。巴川上ふ。まぬ。びと  
年紀四十ありと。神な。して。顔色蒼然。瘦がれ。う。と。腫の光り  
つ。ふらり。ま。後の衣血小。深て二月の雪。ま紅梅の花散か。る。ま。相。似。り。  
又川下ふ。行め。る。右少辨俊基朝臣あ。ぞ。ま。る。世ふ。あ。せ。  
と。ん。都。あ。く。見。る。形。あ。あ。あ。う。か。ぐ。怒。ま。る。面。色。冷。く。あ。ふ  
悩。げ。ふ。あ。み。り。少。選。物。も。い。り。ぐ。ま。る。る。が。燐。火。の。あ。る。隱。く。せ  
飛。ち。り。ぬ。よ。れ。子。の。も。れ。あ。り。せ。が。肝。心。も。き。え。う。せ。く。ま。地。よ。ま。え  
入。つ。れ。も。權。智。道。高。の。沙。門。あ。れ。が。敢。く。さ。い。げ。る。氣。色。あ。く



けくハ宗行俊基の冤魂。瞋恚の不住。醒ぶとく。修羅の  
 ちまもみ迷ひぬる。よとアそけき。今さらしに。滅ぶ。念  
 殊仇怒つ。瞻居らる。且く。後基のいつく。いふ宗行  
 卿。これ。羊。相摸入道。とら滅。君の寢襟。と中め。子  
 らんと。風夜。あ。身を碎た。ちく。身方の武士。とわ。ひも。え  
 り。土岐頼貞。が。反。忠。より。支。あ。つ。れ。主上。ハ。強。攻。め。思。は  
 ら。さ。ま。め。い。臣。ハ。い。山。命。と。う。あ。ふ。これ。ど。も。誠。忠。む。を  
 義貞。上。毛。より。討。く。出。正。成。天。王。寺。又。出。張。し。播。州。不  
 赤。松。起。里。尊。氏。官。軍。み。ら。せ。け。れ。東。軍。頼。又。滅。亡。し。て。公  
 家。一。統。の。天。下。と。あ。あ。ぬ。る。の。れ。主。上。 叡。慮。涉。く。誓。り。ま。せ。ば  
 政。事。嘗。道。み。ら。ぶ。忠。臣。ハ。遠。ざ。け。ら。も。倭。人。ハ。時。を。均。て。臣。ホ  
 が。追。福。を。る。修。く。あ。り。ば。そ。れ。子。孫。と。も。百。出。さ。ま。ぞ。日。夜。醜。樂  
 小。醜。り。ぬ。一。天。下。ぬ。ら。び。れ。ま。ん。と。掌。と。り。を。ぐ。ら。ら。め。や  
 多。い。の。川。の。水。鬼。と。な。れ。ど。風。怒。は。く。よ。訟。ぐ。て。と。憤。と。つ。く  
 三。つ。つ。咄。せ。ば。宗。行。の。つ。く。これ。し。住。る。兼。久。三。年。七。月。十。日  
 義。時。父。子。又。囚。せ。て。恨。と。さ。く。海。子。遺。と。と。百。好。年。や。や  
 天。運。循。還。し。く。九。代。後。亂。高。時。入。道。が。時。お。む。り。と。冤。未。終。ふ  
 ち。あ。び。こ。う。あ。ら。あ。れ。ど。多。年。邪。念。と。積。し。多。れ。つ。く。迷。ひ。の。雲  
 晴。く。遮。莫。冤。ハ。あ。ら。の。山。は。あ。り。め。を。何。ら。た。の。く。と。嘆。息  
 を。後。基。や。沈。吟。し。つ。く。主。上。女。色。ハ。御。心。融。け。住。り。を  
 二。つ。れ。あ。り。ま。せ。ば。い。ま。も。む。も。み。あ。ら。い。り。山。は。宗。と。あ。し。  
 聖。人。ホ。と。や。ま。さ。ば。叡。慮。と。あ。ら。誘。く。誓。り。せ。ら。れ。と。や。あ。ん。

後醍醐天皇御紀卷之一

縦の永却の苦患はうらうらと一びいれ宿然ちうさてやハ  
 妙づたと奮然とく吻く息よ小夜山おろ吹きて岸  
 のむら菊うら戦ぶ鬼火たたり散るまづれ菊河の水濁と  
 ころれく二人此形水中お飛入るよと見えけるが水ハ忽ち血  
 又變ト宗行卿の声とく右少辨く津方ハ禽獸と生と  
 二里人を悩めぬこれハ女人の生と引障礙とをさんといふ  
 声ハ巖堰浪つふれ少え形ハ見え火をうらり既めて  
 霧これ風ちづり利夕陽西よりおたたくゆりあけ時とら  
 了ぬ北殿司ハ怪有のちひをなしくある岸辺にありらるが流  
 る水より向ひ二人の朝臣頓生菩提脱苦共樂と念とつ  
 遂お合谷坂と臨くしそたがるが妙が山中ある槇の系と下地方

をさる時日暮已ふれく擣衣の音ちりくぞえ路の傍ふ一  
 宇の白屋あけけりまをりち立らる宿をとりむれば樵夫の  
 家とおぼしめて裡面よりおきたまぐ柴積るる祿一個の老翁  
 地爐の邊よりとらとらと外面より二ハよりれ女乃かゝる山おま  
 似げあきて雪ふりたすぐ臈瀾するが簷下の月みまむむ  
 りひもも撓かげお衣くら居らるひ女只今北殿司の宿と乞を  
 乞くまをりち槌ととら火くつと津の宿しといひあむむこの  
 まぬらまぶくさくともつおせん夜のありもはうらなうさく  
 飯とふあられがこの葉のやまをら北殿司のいつく貧道ハ  
 これ行脚飛錫のちあられ飽まぐ食の暖は寝ること好まむ  
 只やげく一夜をあるせあつと乞需む女はうら點改れくまぐ

貞進

言りてとふく辭さるも後世の罪ふり。うち入るやあつと  
 つひく伴ふ。あつた公羽延引まり。あやうと請じり粟の  
 飯ふ山茶くらとくえく。あめやふ郷食しけや。兆殿司つづく二人  
 の形状をえりよ。親子りつ行んば言語をり。懇勤なる。あふ  
 荒布の破衣を被く。髪を蓬をいつてけども。いとあく昔の  
 一面影あつりれ。彼首の家廟あ。燈明の光遠くゆくと。  
 朝臣は肖とくところあ。あつたやあつた。あつた。あつた。あつた。  
 魂忠義に死するもの。子孫とて。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 くれこれ女彼朝臣の女兒あ。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 言りて。言りて。言りて。言りて。言りて。言りて。言りて。言りて。

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 俊基の女兒月小夜姫あ。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 貧道ハ洛陽東福寺の明兆あ。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 破草鞋と稱は。俊基朝臣せよ。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 東福寺不詣あ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 貌彼朝臣の面影あ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 ぬまば。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 少辨ハ當今才一の忠臣あ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 御せ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 何の故あ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 月小夜姫ハ回答り。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 吐不涙を傳へ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

後集言石言遺集卷之一





しく彼老翁のいづく。そはが、俊基譜代の家隸不春本  
兵た弟の為宗といふものあり。三年以前七月上旬石少辨囚徒  
とあつても、關東は下向のたれ八月小夜姫のちが十五歳の  
おりや、父の寂期ふありとて、旅路におり、秋あがらぬ空  
とあくれおまは二一人らうとて道とひそた。やこれ山よりあ  
すふ。その菊のあては、おとと沙汰まきと、夢よ愛はつ  
あらし、姫のあけにさるれば、お鬱憤、お言もあく。  
殉死せよと、おのぬまど。これあがらぬ、姫君の先途と見  
とける人を、お惜しく、お命あがらぬ、姫と勅りあがらぬ。  
日二日ハ山中、お哭う。うとて、主上ハ隱岐国より、お風  
まれば、今も、おなもあ。主従あふ足をとどめ、おれハ山又

は薪と推し、姫ハ糸を繰り、布と織おれぬ、お世に、お  
らや、三とせの春秋と経る。元は、お姫君ハお泉のおを、  
けれど、謀叛人乃餘黨とて、お等師より、お死門もあ、  
日野三位良政卿と、お執柯ありぬ、おそれ、お遮り、お祝髪、  
を、お欠、お只生活の、おと、お主従、お山の観音寺、お安  
運び、俊基朝臣の菩提を祈る、お地す、おあ、おふ、お夏  
東夷、お時、おはらび、お主上、お世、おお、お姫、お俱、  
この、お良政卿の所を、おた、お姫、お小、  
く、お世、お更、お兼、おお、おお、おお、おお、  
光景、おく、お良政卿、おる、おお、おお、おお、  
お涙、おお、おお、お殿司、お主従、お忠孝、おお、おお、

都ハややちづらぐらぐらとどもいまま人のあちち和せだ風ま區ふ  
し良女卿の安否をさうべげせよ凡時をさうふ金衣王食  
み飽みぬる方れ縁の手業よつと瘦く。この山中小日さおん  
りよつとさよこやれれくわれ救ふ上。あはれ苦ともはりや  
とつ憩ふまえぬれ。月小夜涙とさうどつと。りよつと世乃  
罪ふく。母よま稚くてまもま。父上非命よ死しる。今や夫  
小齊眉つ。世よはらうよもあうて。洛小帰るとと縁つと。さう  
罪障消滅父母追福のつとあ。いある善根と。いよつと  
きと伺ひの。北殿司のいつ。幽霊得脱れ切徳無量なうと。さ  
就中洪鐘供養ふ志く。とあ。祇園精舎の鯨音よ六觸の醉  
を醒しと。三熱の苦とまぬる。抑小夜中山無間の鐘乃由来とら

ぬ小入皇四十五代聖武天皇の天平年中菊川の東宍不  
高道とつと仙人あうらう。一まび弘誓の大願を發し。一個の洪鐘  
を鑄く阿ハが嶽の絶頂ふを掛うけ。かく高道この山は  
去く後いつあ悪魔のつとあ。人これ鐘と撞けた世界の財  
寶を地みあつと。富貴あうらのやうと風声に愚ある窮民  
とて孤實とあひ。鐘とつと聚寶盆を踏へ撞木とつと揺錢樹  
にあうと。これと撞んとつと却く溪庭みまらび隨生あうと。無  
地獄に陥るめ多うけき。世の人これと無間の鐘とあはせ  
ちうふ一日仍脚の僧これ山よせまらふ。これと歎け。遂み  
鐘とハ阿ハが嶽の巔に埋の上小一宇の草堂と建立して大悲の  
尊像と安置し。手執今の觀音寺これあり。あれ他あり。彼

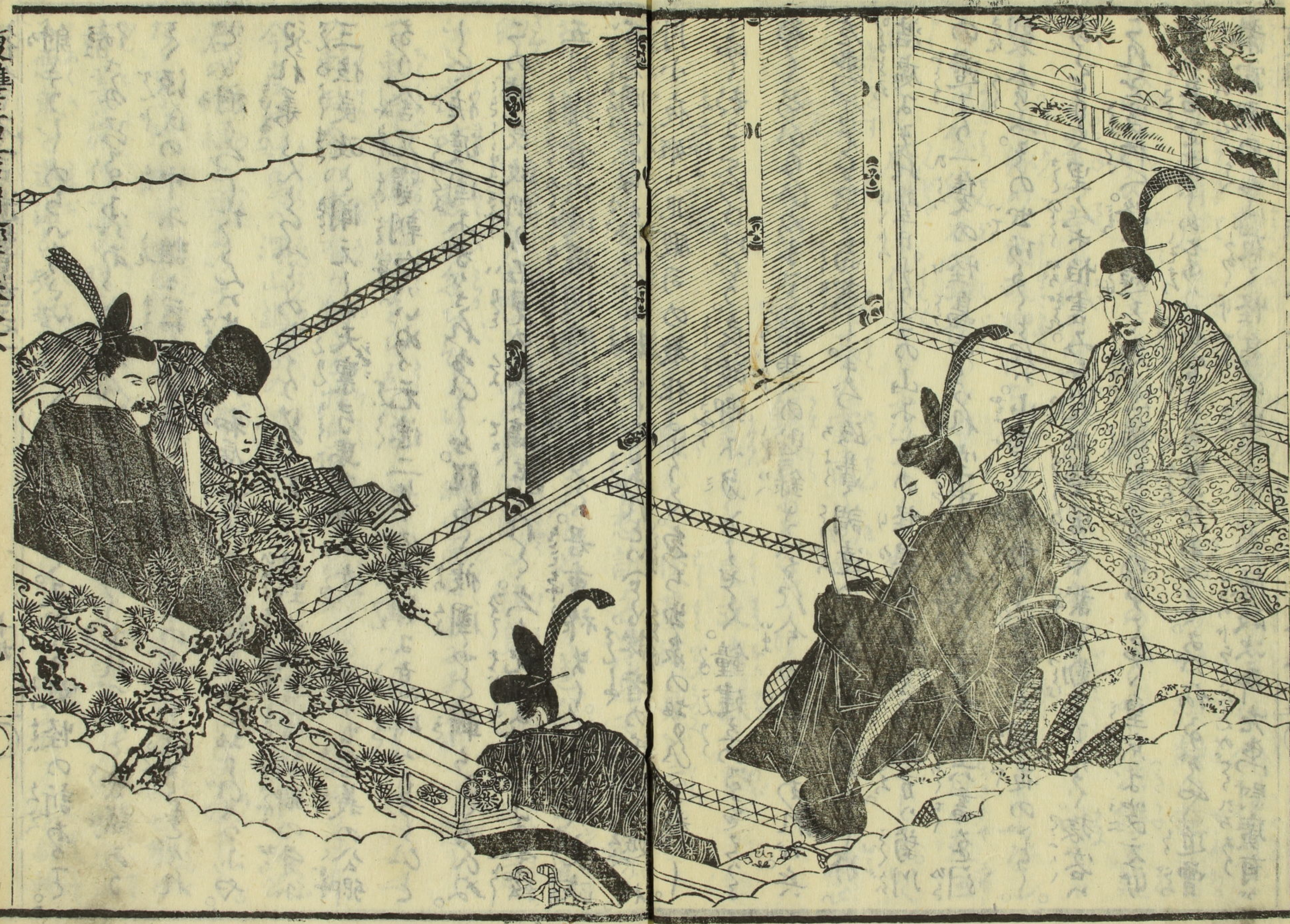
高道を救世觀世音の權化行脚の僧ハ高道仙人乃後方ニ  
 一々衆生濟度の方便あり。是より後この山ハ洪鐘の施主有  
 り。父母得菩提の功德を授け給ふ。かく洪鐘と建  
 立し。峯の寺ニ納め給ふ。今この法方ありハ叶ま  
 げま。夙縁あり良政卿のちりりと借り。志願と成就し給ふ。し  
 これ祝誓深衣の功德ふりまされり。説示しけき。月小夜五  
 従ふ。感激し。信心きり。お祈り。ゆき。袂をぬき。しり。び  
 て。北殿司ハ夜す。俊基の靈前ニ回向し。やうや。天のふ及び  
 ぬま。遂ふ。あ。と。ま。お。く。鎌倉あぞ。う。ける。

第二編

勅を奉り。良政遠嶽ニ登り。  
 愛を顧み。俊基後身と示す。

月小夜姫ハ北殿司の教化より。忽ち出家の如し。上齋し。  
 ち。お。ま。ご。の。ひ。ね。ら。良政卿ふ。あ。と。せ。く。鐘建立の予と。う。る。  
 る。く。あ。い。の。ぬ。ま。ご。路費の貯録さ。う。れ。今。の。身。あ。れ。が。兵  
 左。あ。つ。し。を。つ。ご。あ。然。し。ま。づ。路費調達の工夫を。め。ぐ。り。け。り。  
 浩。處。ま。る。此。翌。日。より。この山。ハ。一。つ。の。怪。異。出。来。ま。り。う。り。地。方。ハ。菊。川  
 の。邊。より。一。隻。の。怪。鳥。あ。り。れ。空。中。を。飛。行。し。て。午。馬。六。畜。を。引  
 裂。食。ふ。その。出。り。も。と。れ。ハ。山。鳴。り。峯。動。く。白。晝。と。割。夜。の。ご。ら。く。  
 あ。つ。り。り。里。人。ハ。怕。害。み。る。家。ニ。蟄。居。く。業。を。勤。ま。り。な。く。旅。客。ハ  
 これ。を。皆。怖。く。路。を。避。く。人。迹。稀。あり。あ。の。り。も。ち。皇。京。ニ。ま。え。け  
 ま。君。と。ま。り。め。な。り。百。官。百。司。驚。れ。あ。や。と。あ。へ。行。り。ま。り。近。曾  
 紫。宸。殿。の。ご。ら。夜。ハ。怪。鳥。の。出。り。し。と。バ。隱。岐。次。部。左。衛。尉。廣。有。が

東華正言



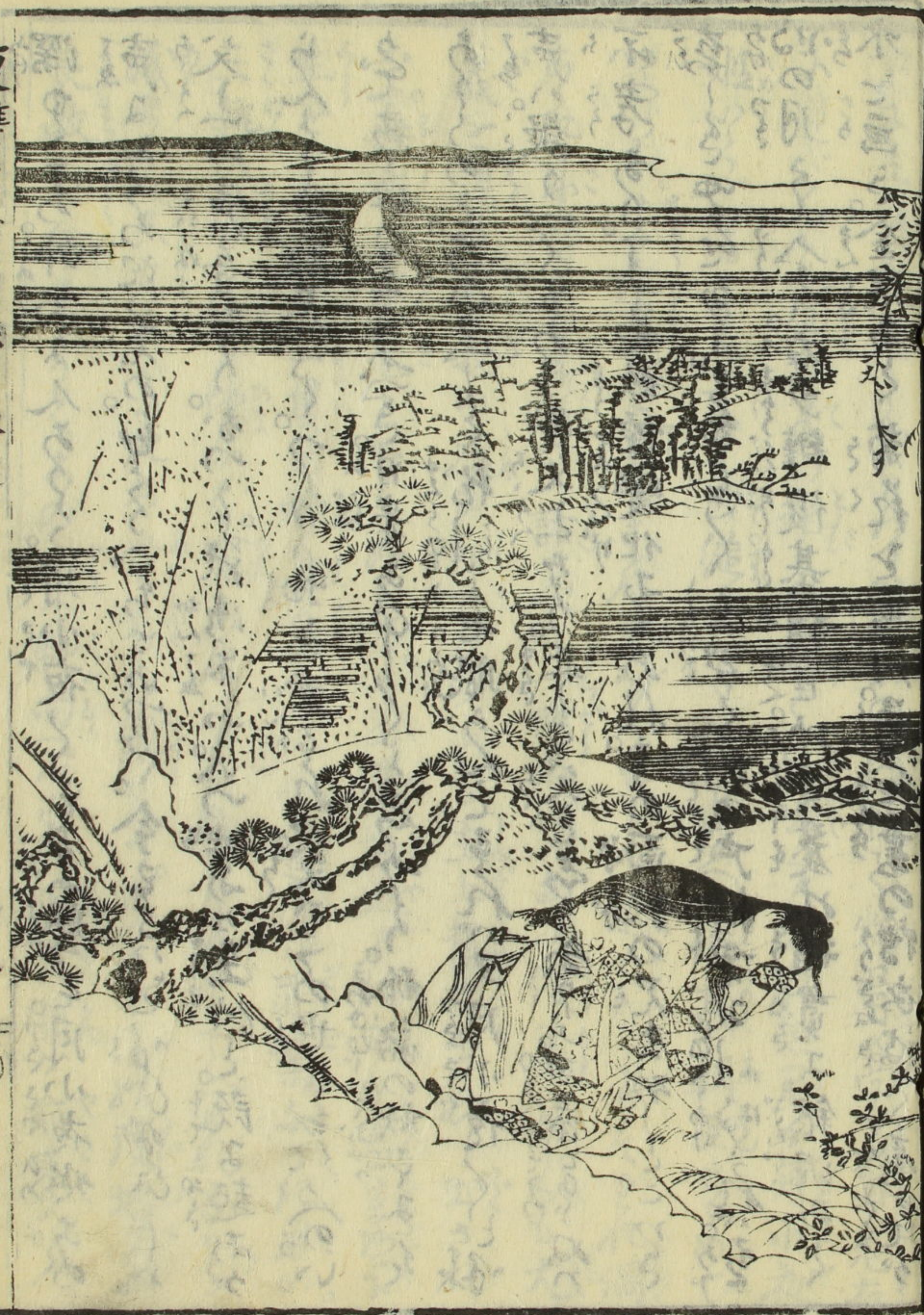
行傳

射うらうのら。いまどびくも何らばと。又のら妖怪の訃ありて。  
 何さみまのりふあう。何人とり討まはれ。ちんべたと會議あり  
 う源氏の中ふ誰う。霧りむらむ射捕づらりのあう。尋らまされ  
 ども射らう。ちんべの生涯の恥辱末代乃瑕瑾ありと。あひひらふや。  
 日れ兼くんとらふ。のたうりけを。まくに日野中納言資朝卿の身ふ  
 三位良政と聞え。天稟弓馬のたふ達しく。まう忠義の公卿  
 あり。舎兄資朝々いぬ。元徳二年の國難は高時かまう。ひと  
 しく佐渡国ふかりされあひ。從あく彼國あく斬らまぬぬ。  
 この時良政卿も石見の國に謫せしむ。久く死ねあひせ。今茲  
 五月鎌倉六波羅同時ふ亡うせ。君重祚あしくけ。良政  
 石見國とらち。ちんべのあふおみ。毛糸だといども。謫者の舌頭は遮られ  
 させる。因心賞もあう。れは。むか。愁訃をのら。て三條の館ふ  
 切りけ。これを。の器。埋ら。人。と。り。れ。ま。ま。百。里。小。路。及。房  
 卿。あ。く。奏。聞。を。歴。く。あ。の。良。政。卿。と。怪。鳥。退。治。の。大。將。と。定  
 らる。良政の熱有。ちんべ。け。時の面目。あ。あ。れ。然。て  
 て勅命を奉。既。ま。ら。ま。人。と。ら。ひ。ら。る。が。つ。く。あ。く。い。わ。い  
 の頼政。今。の。廣。有。が。射。う。怪。鳥。ハ。共。禁。闕。の。外。有。と。ま。う。ら。う  
 今度。妖。鳥。ハ。深。山。幽。谷。の。裡。に。あ。る。な。れ。ま。の。か。量。ら。う。が。う。只  
 君。の。洪。福。と。頭。ま。う。た。神。佛。の。冥。助。を。仰。ふ。ま。う。と。念。し。く  
 たら。小。清。水。寺。に。參。詣。し。心。中。に。念。ま。う。く。南。無。歸。命。救。世。觀。世  
 音。菩。薩。佛。ハ。坂。上。田。村。麻。呂。ハ。大。慈。大。悲。の。衛。護。ふ。ら。う。て。鈴。鹿。山  
 西。鬼。と。退。治。を。弘。誓。今。あ。の。り。し。ら。う。と。良。政。ま。ら。う。と。副。輒

復集石言遺集卷之一

二十

怪鳥と退治し民の性命を救ひぬと。丹精又祈請し。羊  
 守をさるとして。おとくをあらわさる。金像の觀世音を  
 花の二百餘騎を引率し。遠州を臨み。啓行のまかして。良政  
 卿ハ七八日を越し。小夜中山と名ぬひし。山に多焼かき。山中よりけ  
 登り。バ。妖鳥ふく。霧まじく。容易射し。うぐさか。と。深念あり  
 二百餘騎の士卒を悉く。西坂の麓ふとめ。血たき。なる。師  
 等。橘王計。ぬ時。包と。とり。剛勇の壯夫。只一人。と。め。俱し。え。み  
 怪鳥を。ぞ。索ぬ。ひら。これ。う。先。中山。あ。怪鳥退治の大將都  
 下向し。と。風。安。す。と。月。小夜姫。ハ。都。と。き。も。あ。う。く  
 何と。よ。人の。あり。ひ。と。賤の。見。あ。同。多。三。位。良。政。卿。と。中。人  
 云。と。云。雲の上。人。あ。り。お。り。と。答。ふ。姫。を。あ。の。り。す。う。う。あ。り  
 と。と。う。と。ま。う。ゆ。と。と。あ。ひ。か。ぬ。う。び。と。ひ。め。ぐ。せ。良。政。卿  
 ハ。幻。に。り。執。柯。あり。と。い。ども。枕。あ。り。て。夫。あ。り。あ。ら。だ。今。か。く。日。が。方  
 零。落。く。昔。の。様。も。あ。ら。ぬ。お。の。これ。を。月。小夜姫。かれ。と。名。告。出  
 ん。と。ぶ。ゆ。と。せ。し。と。せ。し。と。あ。ひ。つ。や。ひ。め。ハ。兵。を。集。つ。う。い。つ。く。流。夫  
 婦。の。宿。願。も。源。平。の。武。士。あ。る。中。に。怪。鳥。の。討。た。う。と。良。政  
 卿。の。む。し。ひ。あ。つ。と。偏。に。觀。世。音。に。寄。り。と。お。は。り。出。さ。し。この。と。聊。し  
 ぬ。さ。ふ。あ。ら。だ。それ。が。と。西。坂。の。御。陣。を。棄。り。紫。内。仕。は。ぶ。と。ん。出  
 去。り。ける。が。少。選。と。う。う。身。を。い。つ。く。良。政。卿。ハ。怪。鳥。の。所。在。と。さ。ら  
 ん。山。ふ。く。と。け。入。り。ひ。く。彼。御。陣。あ。り。ま。さ。だ。と。ら。ふ。か。あ。ら。と。べ。さ  
 して。あ。ら。れ。も。絶。く。あ。つ。り。の。あ。り。け。ふ。日。も。あ。ら。ぬ。聖。六。つ。と。め。く。あ  
 ぬ。ひ。あ。ら。ぶ。と。い。ひ。く。主。從。次。の。日。の。音。信。を。ま。ら。る。が。その。夜。も。既。あ



深中<sup>あやみ</sup>の外面<sup>うへめん</sup>は人<sup>ひと</sup>ありく。月小夜<sup>つきせや</sup>くとよぶ聲<sup>こゑ</sup>を月小夜姫<sup>つきせやひめ</sup>の  
 声<sup>こゑ</sup>はわらわにさめぬ。とらうごちのつづく。今<sup>いま</sup>もついでにひびぬひひ。  
 父上<sup>ちちのうへ</sup>の声音<sup>こゑ</sup>なり。おつづくは流<sup>なが</sup>しや。いづれ地<sup>ち</sup>ありまはと。既<sup>すで</sup>に起<sup>おき</sup>あが  
 らんとしそ夢<sup>ゆめ</sup>つづく。つづく物<sup>もの</sup>を夢<sup>ゆめ</sup>にたれば父<sup>ちち</sup>のこの世<sup>よ</sup>よあか人のい  
 るであらにまなぶごと。日<sup>ひ</sup>来<sup>き</sup>あひしくとらう。狐<sup>きつね</sup>貉<sup>たぬき</sup>の妖<sup>まじ</sup>まを  
 あらめとさひく。花<sup>はな</sup>に老<sup>らう</sup>眠<sup>ねん</sup>らんこまれば又<sup>また</sup>月小夜<sup>つきせや</sup>くと  
 声<sup>こゑ</sup>ハ疑<sup>うたが</sup>うづもあはぬ父上<sup>ちちのうへ</sup>なり。正<sup>ただ</sup>しく父<sup>ちち</sup>とありあり。回<sup>まわ</sup>るるあは  
 不<sup>ふ</sup>孝<sup>こう</sup>あり。とや妖<sup>まじ</sup>怪<sup>かい</sup>變化<sup>へんぎ</sup>ありあはれ。その面<sup>おもて</sup>貌<sup>がた</sup>の兄<sup>あに</sup>まやと。この  
 妖<sup>まじ</sup>もやせあり。まかしくとらう。門<sup>かど</sup>の戸<sup>かど</sup>細<sup>こ</sup>や。いづれは  
 的<sup>あて</sup>の月<sup>つき</sup>へ入<sup>い</sup>り。右<sup>みぎ</sup>少<sup>すく</sup>辨<sup>べん</sup>俊<sup>しゅん</sup>基<sup>き</sup>朝<sup>あさ</sup>臣<sup>しん</sup>地<sup>ち</sup>黄<sup>わう</sup>菱<sup>りやう</sup>比<sup>ひ</sup>指<sup>さし</sup>貫<sup>くわん</sup>。銀<sup>ぎん</sup>泥<sup>でい</sup>あり  
 水<sup>みづ</sup>と画<sup>え</sup>さ。金<sup>きん</sup>泥<sup>でい</sup>あり。菊<sup>きく</sup>花<sup>はな</sup>と画<sup>え</sup>に。赤<sup>せき</sup>紅<sup>くわう</sup>葉<sup>えつ</sup>の衣<sup>い</sup>袂<sup>たもと</sup>に。尾<sup>お</sup>はたが  
 下<sup>した</sup>まをふつ。兄<sup>あに</sup>ふはりの面<sup>おもて</sup>貌<sup>がた</sup>の肉<sup>にく</sup>脱<sup>だつ</sup>く。頰<sup>ほ</sup>骨<sup>こつ</sup>高<sup>たか</sup>く。鬚<sup>ひげ</sup>はたを  
 不<sup>ふ</sup>逆<sup>ぎやく</sup>ぐらと細<sup>こ</sup>たの指<sup>さし</sup>まを長く生<sup>な</sup>ます。これを兄<sup>あに</sup>の月小夜<sup>つきせや</sup>  
 姫<sup>ひめ</sup>の。かかしくまき。出<sup>で</sup>継<sup>つぎ</sup>うらん。とらう。俊<sup>しゅん</sup>基<sup>き</sup>朝<sup>あさ</sup>臣<sup>しん</sup>とめて  
 つづく生死<sup>しんじ</sup>道<sup>だう</sup>を異<sup>ちが</sup>なまれば。うらむと。近くを。これ偶<sup>ぐう</sup>  
 あに来<sup>き</sup>ぬると。流<sup>なが</sup>しや。話<sup>わ</sup>さ。一條<sup>いちじやう</sup>あはれあり。俊<sup>しゅん</sup>基<sup>き</sup>の中<sup>なかつ</sup>も大<sup>だい</sup>  
 義<sup>ぎ</sup>を謀<sup>まう</sup>り。忠<sup>ちゆう</sup>義<sup>ぎ</sup>の為<sup>ため</sup>に死<sup>し</sup>す。とらう。主<sup>しゆ</sup>上<sup>じやう</sup>舊<sup>きう</sup>功<sup>こう</sup>を。出<sup>で</sup>され  
 る。無<sup>む</sup>祀<sup>い</sup>の冤<sup>えん</sup>鬼<sup>き</sup>となりぬ。その遺<sup>い</sup>恨<sup>こん</sup>止<sup>と</sup>まらぬ。畜<sup>ちゆう</sup>生<sup>せい</sup>はな  
 生<sup>せい</sup>とけ。魂<sup>こん</sup>魄<sup>ぱく</sup>一<sup>いつ</sup>隻<sup>しつ</sup>の蛇<sup>へび</sup>身<sup>み</sup>鳥<sup>とり</sup>とあり。されば罪<sup>ざい</sup>業<sup>ごう</sup>ふらに。の  
 三<sup>さん</sup>熱<sup>ねつ</sup>の苦<sup>くる</sup>と絶<sup>つ</sup>る隙<sup>ひま</sup>あり。罪<sup>つみ</sup>あり人<sup>ひと</sup>畜<sup>ちゆう</sup>成<sup>じやう</sup>たり。食<sup>く</sup>ふ。これあ  
 流<sup>なが</sup>しや。只<sup>ただ</sup>忘れが。愛<sup>あい</sup>着<sup>ちやく</sup>の羈<sup>か</sup>り。あつふ。度<sup>た</sup>壻<sup>しよ</sup>を  
 良<sup>りやう</sup>政<sup>せい</sup>勅<sup>しやく</sup>命<sup>めい</sup>あり。その山<sup>やま</sup>不<sup>ふ</sup>馳<sup>ち</sup>向<sup>むか</sup>は。日<sup>ひ</sup>明<sup>あ</sup>る。渠<sup>みち</sup>が前<sup>まへ</sup>先<sup>せん</sup>ま

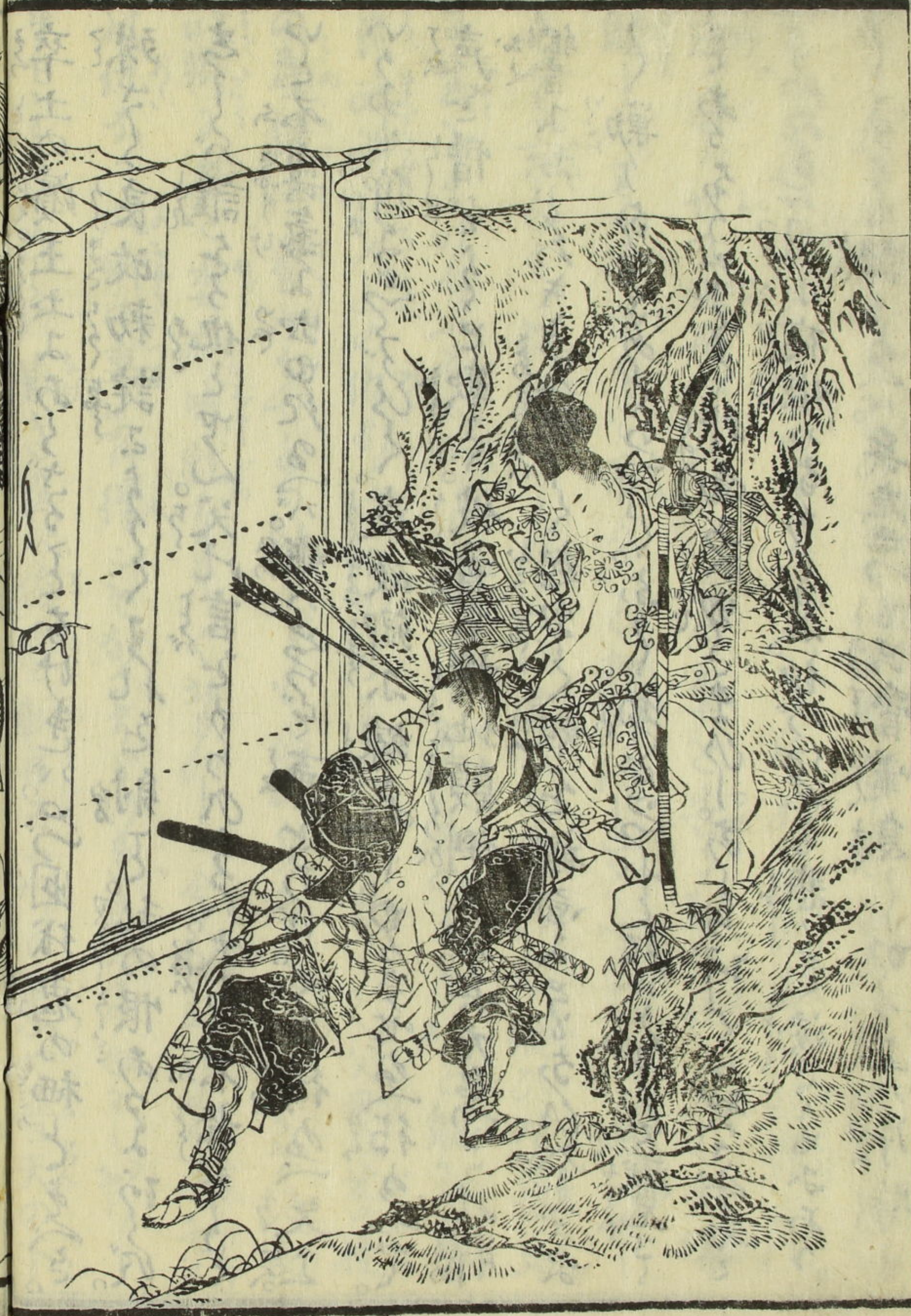
下<sup>した</sup>まをふつ。兄<sup>あに</sup>ふはりの面<sup>おもて</sup>貌<sup>がた</sup>の肉<sup>にく</sup>脱<sup>だつ</sup>く。頰<sup>ほ</sup>骨<sup>こつ</sup>高<sup>たか</sup>く。鬚<sup>ひげ</sup>はたを  
 不<sup>ふ</sup>逆<sup>ぎやく</sup>ぐらと細<sup>こ</sup>たの指<sup>さし</sup>まを長く生<sup>な</sup>ます。これを兄<sup>あに</sup>の月小夜<sup>つきせや</sup>  
 姫<sup>ひめ</sup>の。かかしくまき。出<sup>で</sup>継<sup>つぎ</sup>うらん。とらう。俊<sup>しゅん</sup>基<sup>き</sup>朝<sup>あさ</sup>臣<sup>しん</sup>とめて  
 つづく生死<sup>しんじ</sup>道<sup>だう</sup>を異<sup>ちが</sup>なまれば。うらむと。近くを。これ偶<sup>ぐう</sup>  
 あに来<sup>き</sup>ぬると。流<sup>なが</sup>しや。話<sup>わ</sup>さ。一條<sup>いちじやう</sup>あはれあり。俊<sup>しゅん</sup>基<sup>き</sup>の中<sup>なかつ</sup>も大<sup>だい</sup>  
 義<sup>ぎ</sup>を謀<sup>まう</sup>り。忠<sup>ちゆう</sup>義<sup>ぎ</sup>の為<sup>ため</sup>に死<sup>し</sup>す。とらう。主<sup>しゆ</sup>上<sup>じやう</sup>舊<sup>きう</sup>功<sup>こう</sup>を。出<sup>で</sup>され  
 る。無<sup>む</sup>祀<sup>い</sup>の冤<sup>えん</sup>鬼<sup>き</sup>となりぬ。その遺<sup>い</sup>恨<sup>こん</sup>止<sup>と</sup>まらぬ。畜<sup>ちゆう</sup>生<sup>せい</sup>はな  
 生<sup>せい</sup>とけ。魂<sup>こん</sup>魄<sup>ぱく</sup>一<sup>いつ</sup>隻<sup>しつ</sup>の蛇<sup>へび</sup>身<sup>み</sup>鳥<sup>とり</sup>とあり。されば罪<sup>ざい</sup>業<sup>ごう</sup>ふらに。の  
 三<sup>さん</sup>熱<sup>ねつ</sup>の苦<sup>くる</sup>と絶<sup>つ</sup>る隙<sup>ひま</sup>あり。罪<sup>つみ</sup>あり人<sup>ひと</sup>畜<sup>ちゆう</sup>成<sup>じやう</sup>たり。食<sup>く</sup>ふ。これあ  
 流<sup>なが</sup>しや。只<sup>ただ</sup>忘れが。愛<sup>あい</sup>着<sup>ちやく</sup>の羈<sup>か</sup>り。あつふ。度<sup>た</sup>壻<sup>しよ</sup>を  
 良<sup>りやう</sup>政<sup>せい</sup>勅<sup>しやく</sup>命<sup>めい</sup>あり。その山<sup>やま</sup>不<sup>ふ</sup>馳<sup>ち</sup>向<sup>むか</sup>は。日<sup>ひ</sup>明<sup>あ</sup>る。渠<sup>みち</sup>が前<sup>まへ</sup>先<sup>せん</sup>ま



る。たひ万夫不當の勇士何百騎むふともこれ又好く方を  
 だ。これと避人の安けきども。人も丁々おき良政は射殺され。  
 御身がせよ出るふらけさふ。この事と告りあり。相多く夫婦  
 睦しく。後世を吊りあつと。打ち合はまき。穿たぬ。蛇身鳥  
 さや方なく。この杉をたてて衣宣りるもの。縦に蛇身鳥  
 と生と受けあふ。一親めく。左のものを。これと射とる  
 良政卿は父上の仇あげや。りうといふ。今身も願ひく。良  
 の為鐘供養せり。今身の願ひく。今身も願ひく。良  
 政卿は父を忝ぬ。成就なき。今由り。今由り。今由り。今由り。  
 仇ある彼卿の妻あ得。これある。今由り。今由り。今由り。今由り。  
 せ。これある。今由り。今由り。今由り。今由り。今由り。今由り。今由り。

卒士の濱王土。あつる。これある。今由り。今由り。今由り。今由り。  
 殊々良政勅諭。これある。今由り。今由り。今由り。今由り。  
 ち。誰を仇とせん。父此言をり。大不孝をり。  
 不貞氣よ出た。娘は声とあげ。や。待を。父上  
 いら。仰え。良政卿嫁せ。ゆ。これある。今由り。今由り。今由り。今由り。  
 声を惜む。彼首小撲地顛倒。兵左衛門。此降  
 響よ。起す。娘を。此降  
 く。勲があつ。物と。此降  
 と。ある。外面。此降  
 う。ぬ。月小夜姫。此降  
 う。も。語。兵左衛門。此降

遺集... 遺集卷之一



ちや良政卿は逢奉りおとらうひ宿願を遂めよと  
 つひ主後さう哀傷不堪ぞそれら寝もやてあつげき  
 ちや、雞明曉を告ぐ。そ夜も改まあけみり。かて月小夜  
 姫ち。押入の戸棚より。一面の琵琶張らうゆ。袖めく塵さうら  
 けしひ。それ琵琶の都にあう。日月雪花の友とせと。兵  
 左衛門が負来ゆきや。儀のま業よとあつて。操持もあつが。  
 父上のりあやみ悲しくおぼれれば。けふ頓寫の四つれ絃を。  
 法乃手向よとあつて。とみり。窓の下よつと居て。十悪  
 とつふらも引接を。極樂院ん六彌陀の名號を唱しとつ朗  
 詠しく。弾さぬさるる秘曲を。白屋の裡もとみり。吾尼也の  
 心耳をさるる。感涙をぬる。去程は良政卿は終日山  
 中と待らう。とみり。眼も癒るものもあられ。その夜ハ觀音寺  
 小參籠して。夜とみり。大士乃冥助と祈り。夜明と後又主計  
 舟を將しく。菊の邊を徘徊。槓の原もつらぬ。宣屋の  
 裡ハ琵琶の音あえ。蕭然と秋雨乃梢を零る。傳  
 あまハ良政卿。只管嘆賞しく。あつて。かる深山よとみり。  
 琵琶の秘曲を吹く。とみり。あつて。人の伝承ぞと。なつて。さう  
 關を規ぬ。裡面よりとみり。又つげり。琵琶もあつて。さうゆ  
 良政卿。よとみり。やみ。月小夜をえ。忘れぬ。あつて。さう  
 き。次女あつて。見え。あつて。さう。此後め。それと。あつて。さう  
 良ハ良政卿。且く。その面をうら。瞻して。大お。あつて。さう。月小  
 夜姫。さう。さう。對面あり。さう。さう。あつて。さう。さう。さう。さう。

良政卿

二二

悔しきよかたごとくきみのへおも信耗ぬらう。されどまごころあつといま  
 せしこそうれいれまこと懇心不<sup>おぼ</sup>びえぬふまは兵た来つとま<sup>ま</sup>りてつ  
 ちぐく裡面<sup>うち</sup>又誘ひなれば良政卿も月小夜姫もまづ<sup>ま</sup>つ互<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>  
 のよをぞ語りぬけき

*(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)*

繡像復讐言石言遺言卷之一 畢

